



「港」

外国語と私

がい こと ごと わたし

河竹 登志夫

かわ たけ と し お

私は語学者ではない。が、演劇研究を専門とし、40年間大学教員をつとめ、海外でもしばしば日本演劇の紹介に当たってきた。だから言葉というものの大切さは、身にしみている。

英語で講義や講演をする機会も、少なくない。しかし私の語学力は、たかが知れている。私の英語の基礎は、中学時代の3年間に作られたままだからである。そのかわりその3年間に、私たちはきびしい先生から、リーダーを徹底的に暗唱させられた。それが耳に残っていて、いまも役に立つ。アルファベットからでなく、万国発音記号から教えられたのも、ありがたかった。先見の明のある先生であった。おかげで1957年に初めてアメリカへ行ったとき、発音だけはひどくほめられて、びっくりしたものだ。

その後、早稲田大学で18年間、英語で日本演劇を教えたのも、貴重な経験であった。しかし、知っていることを知っている言葉で話すことはどうやら出来ても、ヒアリングの方は苦手だ。こんなこともある。1982年の夏、歌舞伎のアメリカ公演に、文芸顧問として同行したときのこと。

ノックスビルで万国博が催された年で、そこでも

公演があったが、それを成功させるために事前に歌舞伎について講演をしてほしいと頼まれた。在アトランタ日本総領事自身からの電話で、アトランタを振り出しに、シャーロット、メンフィス、ナッシュビル、ノックスビルの4州5都市を、4日間で単身巡回講演をすることになった。海外公演には1960年のアメリカ初演以来昨年までに12回も同行したが、こんなハードな旅は前後にない。

さて、アトランタでの講演のあとの質問が、さっぱり分からない。見かねて総領事が「私が通訳をさせていただきますし」と、自ら通訳を買って出てくださいました。南部は訛りがひどいとはいえ、やはり戦前の英語教育が会話をおろそかにしたことの後遺症である。その点、私の長女の中国語や末娘の英語は聴くのも話すのも自由自在。戦後の語学教育の美点と、若いころの留学経験の恩恵である。

しかし、そんな貧しい英語だが、講演のときも私は原稿を作って読むことはしない。せいぜいメモを用意するくらいである。ある程度の基礎と語彙があれば、多少まちがってもいい。伝えようという熱意をもって相手の、聴衆の目を見、反応をたしかめながら話すほうが、正確な英語を棒読みするよりずっといいと、私は信じている。

(演劇研究者・早稲田大学名誉教授)

えんげきけんきゅう か わ せ だいがくめい よきょうじゆ